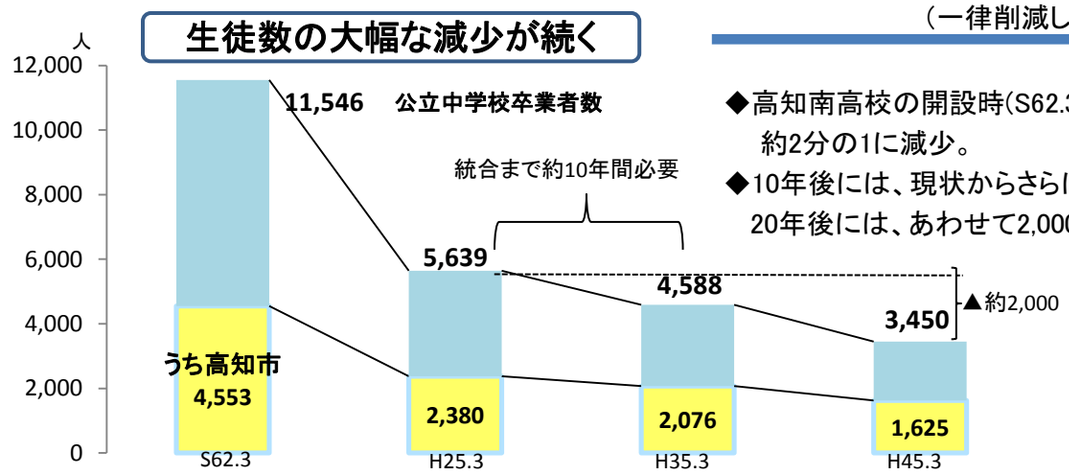
なぜ高知市内の県立学校の統合が必要なのか　～一律に学級数を減らすことで対応できないのか～

資料 1

■今後の大幅な生徒数の減少に伴って学校規模が縮小し、活力が低下していく。充実した教育活動のためには、一律削減でなく6学級を維持することが必要
■将来の子どもたちのために、より良い教育環境を守っていくために、高知市内校でも統合が必要

生徒数の大幅な減少が続く



（一律削減した場合）

◆高知南高校の開設時(S62.3)と比べ、既に、生徒数は約2分の1に減少。
◆10年後には、現状からさらに県全体で1,000人、20年後には、あわせて2,000人減少していく。

学校規模の継続的な縮小に伴い、活力は大幅に低下

●20年後には、高知市内校すべてが5学級以下、3学級以下が3校となる。

●習熟度別授業の実施や部活動などの切磋琢磨できる教育環境の維持が困難

学校規模の違いによる教育効果の比較

【普通科・総合学科を設置する県立高等学校の現状（学校規模別）】

		1学年6～8学級	1学年4～5学級	1学年3学級
全生徒数		783	421	170
全教員数		61	41	28
①習熟度別授業～学習指導の充実～	習熟度授業科目数	**20.8科目（1学年あたり6.9）**	**7.4科目（1学年あたり2.5）**	**4.5科目（1学年あたり1.5）**
	実施授業数の割合	**27.9%**	**17.6%**	**11.2%**
		◆充実した教科担任の教員配置や国の加配制度（6学級の場合4名）を活用して、幅広い科目や学年で実施が可能 →**生徒の進路や課題に応じたきめ細やかな対応が可能**	◇1年生及び2年生の一部でしか実施できない	◇1年生しか実施できない
②専門的な教職員の配置 教員の指導力の充実	教員配置状況	国語 7.7／地歴公民 7.8／数学 8.7／理科 7.2／英語 10.0	国語 4.9／地歴公民 4.7／数学 6.0／理科 4.9／英語 6.1	国語 3.0／地歴公民 3.0／数学 3.0／理科 3.0／英語 3.5
		◆専門科目ごとに専門的教員を複数配置することが可能 ・授業後の学習支援に一層細やかな対応が可能 ・生徒への相談など個々に応じた対応が可能 ・教員同士が学びあう中での指導力の向上	◇一部専門科目に専門的教員を配置できない	◇一部専門科目に専門的教員を配置できない
③部活動の充実 など生徒が切磋琢磨しながら成長できる環境の充実	部活 体育	27	19	12
	部活 文化	17	13	9
		◆特別活動や部活動を通じて、社会性や協調性を育成することが可能 ◆団体競技や文化系の分野で生徒の希望や適性に応じた部活動が可能	◇生徒の希望に応じた部活動を網羅することが困難	◇団体競技の部活動数が限定される （例えば、「野球部はあるがサッカー部がない」、「サッカー部はあるが野球部がない」など）

※岡豊、高知東、高知南、高知追手前、高知小津、高知西の平均値　※安芸、山田、高知丸の内、春野、須崎、中村、宿毛の平均値　※室戸、佐川の平均値

※「生徒数」は「平成25年5月1日現在の学校基本調査」、「部活数」は「平成25年度高知県立高等学校学校概要」、「習熟度別授業科目数」は「平成25年度教員編成資料」を基にした、学校規模ごとの平均値。
※「教員数」は平成25年度当初に配置した主幹教諭、教諭及び常勤講師の学校規模ごとの平均値。

一定の生徒数の確保が見込まれる高知市及びその周辺地域の中央部では、「一学年6学級以上の維持に努める」ことが必要

一律削減による対応は困難

県独自の予算で教員を配置したとしても、大学進学などの進路実現に向けて多人数で学ぶ環境や、特別活動や部活動の充実など生徒が切磋琢磨しながら成長できる教育環境は確保できない。

学校の統合が必要

① 将来の子どもたちのために、より良い教育環境を守っていくために、高知市内においても高等学校の統合を行うことが必要

② 統合には長い期間（約10年）を要する。
取組が遅くなれば、厳しい教育環境がより長く続くことになる。
→ 少しでも早い対応が必要

◆学校規模を考える上での視点◆

〇生徒の適性や能力、進路希望に対応した柔軟な教育課程の編成や学習指導の実施
〇多様な生徒の集う集団の中で、切磋琢磨しながら育つことでの人間性や社会性の育成
〇高等学校としての教育活動の専門性の確保と教職員の指導力の充実
〇生徒の特性や希望等に応えられる多様な部活動や生徒会活動の実施